

## 工業系女子とはだれか？

—政策・業界動向と工業教育・職業選択をめぐる女性の経験—

(教育臨床講座) 尾川満宏

Who is the Industrial Women? :  
Policy and Industry Trends, Women's Experience of Industrial Education and  
Career Choice

Mitsuhiro OGAWA

(令和元年9月2日受理)

### 1. 問題の所在と研究目的

今日、労働力不足や「一億総活躍社会」政策の文脈で、建設業や製造業に従事する女性が注目を集めている。彼女らは、一足早く市民権を得て、高学歴イメージとともに日本社会に浸透した「理系女子(リケジョ)」ではない。中等教育や中等後教育段階で工業教育を受け、技能職や生産工程の仕事に就く女性たちである。本研究は、工業系キャリアから“降りた”女性も含め、彼女らを「工業系女子」として概念化し、焦点を当てる。

工業系女子は、いまや各種の広告や漫画、企業や学校などのウェブサイトによく登場し、活発なイメージ戦略の対象となっている。労働政策研究・研修機構(以下、JILPT)の最新調査が明らかにしているように、建設・製造業界における「女性活躍推進」施策が進展し、優秀な工業高校女子生徒に対する労働市場からのニーズが高まっていることなどが、背景にあると考えられる(JILPT 2018)。

ところが、職業的な学習やキャリア形成に関する彼女らの経験は、学術的にほとんど注目されず、知られていない。近年、新規高卒就職女性の2割強は工業系職種に就いている(文部科学省「学校基本調査」各年)。しかし、上述のイメージ戦略は、工業系キャリアと女性との間にある相変わらずの距離感をも示している。実際、後述するように、ある工業高校を卒業した女性によれば、専門科目の学習や職業選択の過程で、現場仕事が「女性向け」でないことを学んだという。工業分野のキャリア研究の多くは男性を前提としてきたが、彼女らの経験を無視したままでは、政策や労働市場の今日的動向に対応した知見を得られないのではないか。

彼女らの経験は、女性活躍のみならず、1990年代以降の「学校から職業への移行」研究が興した「教育と職業の関連性」をめぐる議論にも新たな視点を提供してくれるだろう。1990年代以降、新卒就職をめぐる構造的な問題が顕在化してから、学校と職業の

「教育内容における非連続性」と「システムにおける連続性」(石岡 2011) の問い直しが盛んに行われた。このなかで、労働市場における職業教育の意義や効果を強調する本田 (2009) などの議論は有力だったといえるが、その主張の検証は、職種とジェンダーの関連という点で不十分であった。工業系女子の経験は、こうした議論や検証に新たな視点を与えてくれると考えられるのである。

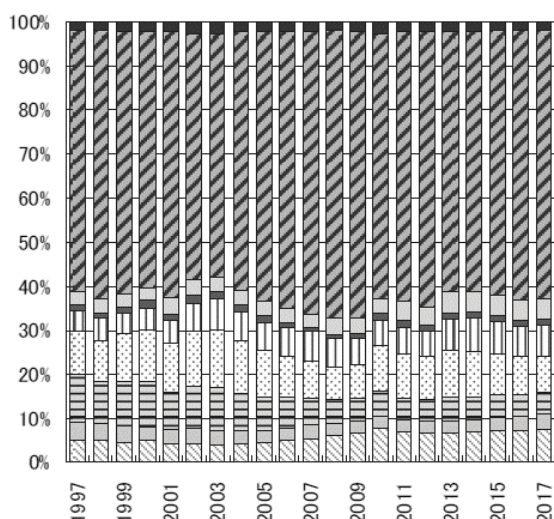
「理系女子」に限らず、専門的職業に就く高学歴女性のキャリアは、比較的研究されてきたといえる(たとえば、加野 1988 など)。そうしたエリート女性のキャリア研究とは異なり、現代ノンエリート女性のそれは、1990年代「学校から職業への移行」問題後に蓄積された。先行研究は、家庭でケア役割を一手に引き受けざるを得ない貧困層の女子生徒の生活実態や、不安定でリスクの高い性労働など女性固有の移行問題を提起した(杉田 2015、上間 2015)。工業系女子もノンエリート層である場合は少なくないと考えられるが、工業高校や工業系専門学校で学ぶ女性たち、工業系職種(とりわけ技能・生産工程)に就く

女性たちは、研究対象としてイメージされにくかった。彼女たちのキャリア形成は、上記のような「女性的」な問題群に必ずしも回収されない。むしろ、職業との〈接続〉が期待される工業教育の場において、ジェンダーをめぐる〈断絶〉に直面しうる点が彼女らに固有の経験であり、そこへの着目が本研究のオリジナリティである。

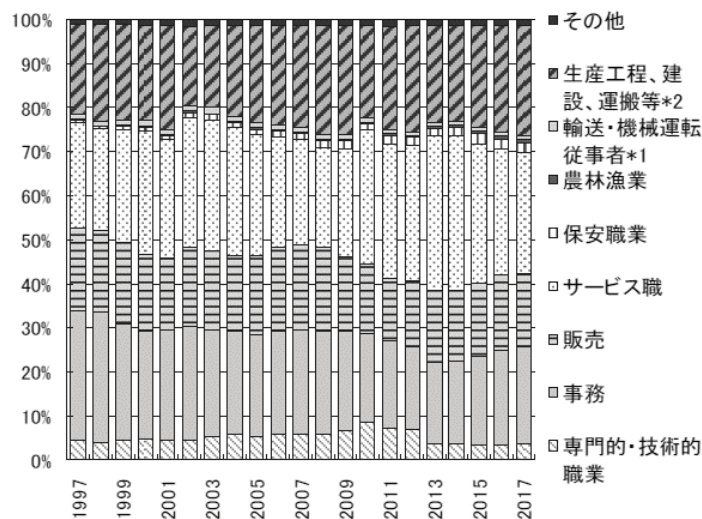
一般的なイメージとは裏腹に、JILPT (2018) による文部科学省「学校基本調査」のデータ整理によれば、高卒女性の 25%程度は「生産工程・建設・運搬等」の職種に就職しており、事務・販売職よりやや多い(図 1)。工業系職種で初期キャリアを形成していく女性たちは、無視できる規模ではない。そのうち、中等教育(主として、工業高等学校)や中等後教育(主として、高等工業専門学校や工業系専門学校)で工業教育カリキュラムを学んだ女性たちを、本研究では「工業系女子」と概念化し、アプローチしていく。

従来の工業分野の教育研究・キャリア研究は、どうしても男性中心であった。その背景には、この分野に関連する教育機関や職種には男性が圧倒的に多数と

①男性



②女性



資料出所：図表 1-10 に同じ。

注：\*1 2010年までは「運輸・通信従事者」

\*2 2010年までは「生産工程・労務作業」、2011年以降は「生産工程」、「建設・採掘」、「運搬・清掃等」の和。

図 1 新規高卒就職者の就職職種構成の変化

引用)

JILPT (2018)、p.22 の図表 1-17。

「資料出所：図表 1-10 に同じ」は文部科学省「学校基本調査」各年版を示す(引用者注)。

いうことに加え、製造業や建設業をはじめとする日本の雇用システムに女性の働き方の実態が当てはまらず、理論的に組み込めない(金井 2011)ことや、工業教育が「男社会」「油まみれ」「勉強よりも体力・元気が大事」(尾川 2012; 片山 2016)といったイメージで特徴づけられてきたことが挙げられよう。これら多様な理由により、工業分野での女性の経験は、職業教育やキャリアに関する研究において扱われにくかったのだと考えられる。

しかし、上記の動向をふまえると、工業系女子の経験を無視したままでは近年の政策や労働市場に対応した知見を得られない。加えて、女性の移行問題を広くとらえ、職業教育の機能を検証するためにも、工業分野で学び働く女性や、工業教育・工業系キャリアをめぐる女性の経験を明らかにしていく必要がある。

以上から、本稿は足がかり的な作業として、工業系職種における女性の位置づけを確認すること(政策、業界施策、イメージ戦略)、工業系女子の初期キャリア形成(とくに学習経験や職業選択の経験)を手掛かりに、工業教育のジェンダーにかかわる側面や機能を見出すことを中心的な目的とする。その際、ジェンダー研究への貢献よりも、移行研究や職業教育の課題に関する示唆を得ることを重視し、今後の調査研究の展望を得たい。

## 2. 工業系女子の位置づけ

### 1) 政策・施策および労働市場

女性の労働や雇用に関する主な法制度として、1985年「男女雇用機会均等法」や、いわゆる1991年「育児休業法」(現「育児・介護休業法」)、2003年「次世代育成支援対策推進法」などが制定されてきた。しかし、そうした法整備にもかかわらず女性の職場進出や社会進出が意図されたようには進まなかったことをふまえ、第二次安倍政権下では「女性活躍担当大臣」が設置された。その後2015年に「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」が制定され、労働者が300人を超える大企業については、自社での女性活躍の状況を把握、分析し、課題を抽出したうえで改善に向けた行動計画の策定・届出・公表が義務付けられるようになった。さらに、そうした女性

活躍に関する情報公開も行われなければならない。このように、大企業を中心として、女性の積極的な採用・雇用・登用や、働き方改革の推進、職場風土の改善などが、求められるようになった。

また、そうした法制度と同時並行的に、各業界が独自に女性の積極的な活用や活躍を推進するための取組を進めるようになった。建設業の分野では、2014年8月には、国土交通省・(一社)日本建設業連合会・(一社)全国建設業協会・(一社)全国中小建設業協会・(一社)建設産業専門団体連合会・(一社)全国建設産業団体連合会が「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定し、建設業で活躍する女性を5年以内に倍増させることを目指して官民を挙げた取り組みがスタートした。また、製造業の分野でも、2015年3月に、経済産業省が中心となった素形材産業における女性の活躍推進に向けた検討委員会「素形材産業の競争力強化に向けた女性の活躍推進の取組指針」が発表されるなど、同様の動きが看取される。

こうした政策・業界動向は、当然ながら企業の採用行動、とりわけ新規学卒労働市場にも新たな展開を呼び込んでいるようである。具体的には、高校における就職指導の現場において、女子生徒に対する採用ニーズが高まっていると感じられている。工業高校の就職指導に関する全国ヒアリング調査から、次のように状況が報告されている。

こうした業界内の新しい言説は、工業高校における就職指導にも徐々に影響を及ぼしているようである。ある工業高校の教員によれば、電気工事への入職希望を持って入学してくる女子生徒がいるが、こうした女子生徒は求人側の企業から歓迎されると予想されている。建設業界全体で若手の人材集めにかなり苦しんでいるということは一般的に知られているところであるが、企業として男子はもちろんのこと、女性従業員の割合をめぐる政策動向もあって、女性社員を確保したいという思いが感じられるというのである。学校によっては、工業高校でも女子生徒のほうが就職しやすい、といった言い回しさえ聞かれるほどである。男子生徒を要望するというより優秀な女子生



徒を採用したいという企業が増えたという感触が、工業高校の進路担当者間で広まりつつあるようである。

ヒアリング調査によれば、こうした動向は建設業のみならず製造業など、工業高校生が就職していく主要な業界に幅広く認められるようである（中略）たとえば、3交代制の工場労働であっても、すでに就業している女性社員の様子を引き合いに出して女子生徒でも十分適応可能であることをアピールする企業などが例に挙げられた。明示的ではないにせよ、以前は男子生徒が選好されると考えられていた職種についても状況はまったく変わっており、女子生徒でも十分働けるためぜひ採用させてほしいと依頼してくる企業が逆に増えているという。

（JILPT 2018、p.113）

こうした動向は特定の地域に限ったものではなく、さまざまな地域で観察されるという（JILPT 2018）。とはいえ、小規模な建設会社（29人以下）の半数弱

は女性トイレを設置しておらず、工事現場の女性トイレも不足している（国土交通省 2015）。こうしたなか、内閣府は、2015年に「日本トイレ大賞」を開催し、各メーカーが販売する仮設トイレのうち高い評価を受けたものを建設現場でレンタルする場合には、その費用の一部を政府が補助することを決定した。また、国土交通省の基準を満たせば「一つ星トイレ」「二つ星トイレ」といった格付けがなされる「トイレ認定制度」も始まった。このように、さまざまな面から、工業分野での女性活躍推進が図られているのである。

## 2) メディアのなかの工業系女子

以上の政策動向・業界動向のほか、メディアのなかで描かれる工業系女子にも注目してみたい。それは、工業分野での女性活躍に関するイメージ戦略のひとつとみなせる場合もあり、写真集やマンガ、あるいは新入社員向けテキストや教材などに見てとることができる（図2）<sup>1)</sup>。そこでは、「土木女子（ドボジョ）」「成形女子」や「電気女子」（電気と工事編集部編 2016）などの具体的な職種や業種と結びつけられた



図2 写真集やマンガのなかの「工業系女子」

引用)

左：清文社編集部『土木女子！』清文社、2014。

<http://www.skattsei.co.jp/search/041114.html>（2019年9月2日最終閲覧）

中央：松本小夢『ドボジョ！』1巻、講談社コミックス、2011。

<http://kc.kodansha.co.jp/product?item=0000036320>（2019年9月2日最終閲覧）

右：大吉・ひのもとめぐる『成形女子こはく：プラスチック工場物語』1巻、三光出版社、2012。

<http://www.bekkoame.ne.jp/ha/sanko/syoseki/saisin/sinkan.htm>（2019年9月2日最終閲覧）

女性が描かれている。しかしながら同時に、写真集では彼女たちのプライベート私服の写真なども並置されており、仕事上の「男勝り」なイメージよりもむしろ「フェミニン」なイメージを強調する構成にもなっている。

なお、こうしたメディアでの女性イメージの産出は、反動的に「電工男子」(電気と工事編集部編 2016)なるものも誕生させた。従来から電気工事業は男性と結びつけられやすかったといえるが、「電設(電気設備)の貴公子」などのキャッチコピーで、従来のイメージに「凛々しく、逞しく、カッコいい」「イケメン」(同、p.3)を付加した男性労働者像が描かれているのである。

このほか、大手飲料メーカーのテレビコマーシャルでも建設現場で活躍する女性が描かれ、同じように大手建設会社の企業広告でも海外の建設現場で活躍する女性作業員が登場したりする。こうした動向には、建設業や製造業を中心に、出版業界や飲料業界を巻き込んだ工業系女子のイメージ戦略を読みとることができる。

また、イメージ戦略ではないところでも、彼女たちの存在に関する社会的認知の動向を垣間見ることができる。たとえば、有力なソーシャルネットワークサービスのひとつであるツイッターにおいて、「工業系女子」をキーワードとして投稿を検索すると、2011～2012年には「工業系女子」というワードとともに「新しい萌え」「森ガールのなやつすか?」「是非流行ってほしい」といった投稿がなされている。2010年3月には「工業系女子 ktkrwww」<sup>2)</sup>という投稿が見受けられ、2009年にもこの語を含む投稿を確認することができた。正確な初出時期を把握するにはより詳細にビッグデータの分析を行う必要があるが、投稿数の多寡から推測するに、2010年前後、あるいは2000年代後半くらいから、工業系女子という言葉が用いられていた可能性が高いと考えられる。

いずれにせよ、この10年のうちに工業系女子が日本社会のなかで概念化されはじめ、労働政策や労働市場においても注目されるようになっていく。次に検討したいのは、工業系女子たち自身が、そうした状況をいかに経験しているのか、ということである。

本稿は、これまで実施してきた調査研究<sup>3)</sup>で収集された事例をもとに、工業系女子の概念化を着想したものである。今後本格的な調査を計画しているが、以下では、きっかけとなった事例をいくつか示し、本稿の関心のもとで再構成したい。

### 3. 工業系女子の学校経験

本節では、本研究を着想したインタビュー調査のもとに、今後の調査研究に向けた仮説的論点を析出しよう。

筆者は、地方都市における工業高校卒業者のキャリア形成についてインタビュー調査<sup>4)</sup>を行った際、数名の女性から調査協力を得ることができた。そのうちの一人であるサキ(仮名、2017年3月調査当時23歳)は、工業高校の建設学科を卒業した女性であった。彼女に工業高校での専門的な学習や生活の経験について話を聞くと、そこでの学習に『向いてない』と思うことはなかった。「普通に楽しかったし、やりがいもあった」と振り返った。しかしながら、高校3年の時には、学科カリキュラムでの学習を通じて高まる「専門性」を活かした就職を、まったく考えなくなったという。

そのきっかけなのか、プロセスなのかは定かでないが、次のようなことがエピソードとして語られた。すなわち、高校での測量などの実習授業で機材を組み立てたり運搬したりする作業の際に、教師が「お前は危ないから」「男にやらせとけ」などと彼女に言い、その作業には加わらなくてよい、という旨の指示を出した。そのとき彼女は、このような作業や仕事を「基本、男仕事だろうなあ」と実感するとともに、こうした作業は特段の疑問を感じることなく男子生徒が担当すべきと考えるようになったという。その後は似たような作業があると、「これ、じゃあよろしく」といったように、男子生徒に任せてきた。

こうした日常的な授業場面を繰り返して経験するなかで、彼女は、そのような「男仕事」は自分＝女性の仕事ではないと考えるようになり、3年生のときに工業系の職種はほとんど選択肢になかったという。このエピソードからは、教育内容や学習内容と具体的な職務の接続が理解されたからこそ、またそこで

の男女の差異を実感したからこそ、自身＝女性と特定の職業との断絶を意識する余地が生まれたといえるだろう。

また、上記調査に参加してくれたもう一人の女性で、別の工業高校の繊維科を卒業したナミ（仮名、2017年4月調査当時35歳）によれば、高校で推奨される資格を取得しても就職場面で意味を持たないなど、実際には職業との接続性を見出しづらい学科カリキュラムもある。ナミいわく、繊維科はそうした学科のひとつであり、女子生徒が多く在籍していたという。職業教育のレリバンスに関する議論は、学習内容と職務の接続を前提としてきた。しかし、そうした接続性をカリキュラムや取得推奨資格などから制度的に強調できるのは、機械系、電気・電子系、建築系、化学系といった工業高校の主要学科に限られ、その他には接続性が強調されない（できない）学科カリキュラムも存在しているようである<sup>5)</sup>。そして、どの学科に在籍するかは多分にジェンダーの要素をとまなっており、このことが工業高校卒の男子・女子のキャリア形成に影響を及ぼしていると推測してよいだろう。従来、工業高校それ自体がジェンダーにかかわるトラックとする見方は共有されてきたといえるが、本調査では、さらに工業高校内部にもそうしたトラックが存在し、中西（2013）のいう専門高校「小学科」とジェンダーの関係を検証する必要性が示唆された。

#### 4. まとめと今後の研究課題

##### 1) 知見の整理

本稿前半では、工業系女子の位置づけについて、政策動向や業界動向、メディアにおけるイメージ戦略の状況を簡単に概観した。工業系女子は政策や労働市場にとって重要なターゲットであり、トイレ大賞などからも、彼女たちの活躍のための予算投下も一定の規模であることが推測された。トイレ以外にも、作業服など女性向けの業界商品が多数流通するようになっている。加えて、本稿では詳述できなかったが、2011年からはじまった、高等工業専門学校の女子学生らが高専の魅力を発信する「高専女子フォーラム」（国立高等専門学校機構主催）といったイベント<sup>6)</sup>

や、女子小中学生を対象とする「けんせつ小町活躍現場見学会」（一般社団法人日本建設業連合会主催）<sup>7)</sup>など、工業系女子を育成するための取組も、この10年間のうちに全国で活発に行われてきたのである。これらと並行して、学校における工業教育のイメージや機能にも変化の兆しが観察された。工業高校の就職指導の現場では、女子生徒をめぐる指導が従来に比べて重要性を帯びてきているようであった。

こうした状況の進行をふまえたパイロット調査と論点提起として、本稿では、工業系女子の学校経験に関するインタビュー調査を紹介した。そこから示唆されたのは、工業高校での学習や生活の経験は、在籍する一部の女子生徒にとって、教育とジェンダー、職種とジェンダーの関係性や規範を学び、再生産していく場となっていた可能性であった。それは工業教育の「隠れたカリキュラム」といえるかもしれない。

工業高校に限らず、高等専門学校や工業系専門学校で工業教育カリキュラムを学び、建設・製造の分野で活躍する女性層が徐々に拡大しているのは、確かである。しかし、女子生徒にとって工業高校で学ぶことの意味は、職業的な知識・技能の獲得や「工業系女子」としてのキャリア形成を促進する側面のみならず、依然として職種とジェンダーの関係性に関する規範を学習する契機としての側面を有している。ジェンダー規範の再生産はさまざまな場面で生じるが、職業教育の場におけるそれは、直接に職種の希望形成、すなわち初期キャリアの歩み方に影響する可能性が高い。したがって、現在の政策動向との関連からも論点として立ち上げる必要があろう。

##### 2) 今後の調査研究に向けて

以上より、本稿のまとめとして、今後アプローチしていくべき「問い」を次のように設定できるだろう。すなわち、工業系女子の学校生活や職業選択、職業生活において、職業教育カリキュラムや「教育と職業の関連性」は、どのように経験されているのか。また、それらの経験から見出される「女性活躍推進」下の工業教育の理論的・実践的な課題とは、いかなるものだろうか。このような問いを中心に、高校や専門学校での工業教育と、地域労働市場や職業生活との接続／



断絶をめぐる工業系女子の経験を丁寧に記述＝解釈することを通じて、工業分野の職業教育の課題と可能性を見出すことが、今後の課題である。

こうした着眼はジェンダー研究の発展にも貢献しうるが、本研究はむしろ「学校から職業への移行」問題の文脈で、高校工業教育などの課題に焦点を当てていく。こうした焦点化により、教育と職業との接続性を高めようとする「移行問題」後の教育改革論議に対して、「工業系女子の経験」という独自の視点から理論的・実践的示唆を提供することができると考えるからである。

本研究の対象は、生徒一般や労働者一般ではなく、工業高校や建設現場などで学び働く、時にマイノリティとしての女性である。あるいは、そうしたキャリアから離脱した女性である。それゆえ、質問紙調査によって全体の概括を目指すのではなく、インタビューを中心とした質的調査によって工業系女子の経験を丁寧に描き、その解釈を通じて「学校から職業への移行」をめぐる教育や各種指導の課題を見出すことが肝要である。しかし同時に、新奇な研究対象であるため、彼女らの間にある多様性を示すことも求められよう。そのため、一定数の調査協力を得てキャリア・パターンを類型化することや、複数の地域で調査を行うことが重要になる。

工業高校の教育機能は周辺地域の労働市場情勢に規定される側面があり(尾川 2012)、また若者のキャリア展望も地域的に形成されることが少なくない(尾川 2018)。そのため、女性が工業教育を受けることの意味を複数地域で調査することの意義は大きいと考えられる。たとえば、工業地帯と農村、観光地などに応じて、工業系女子(であること)の意味や価値が異なるかどうかは、職種とジェンダーの問題が産業構造やローカルな文化とどのような関係にあるか、探究する手がかりを与えてくれるだろう。このことは、各地の若者にとっての「学校から職業への移行」をいかに形づくっているのか、という問いへのアプローチにもなる。工業系女子への着目は、そうした研究課題への扉をひらき、新たなキャリア研究、移行研究を可能にすると考えられるのである。

## 注

- 1) 山田(2003)はマンガに描かれた教師の分析を通じて、社会で求められる教師像を考察し、また現実の教育・学校・教師の実態と比較している。現時点で工業系女子に関する作品は教師マンガと同様の市場を形成してきたわけではないので容易に採用することは難しいが、工業系女子をめぐるメディア研究の可能性は模索してよいだろう。
- 2) 「ktrkrwww」はインターネット上で使用される、いわゆる「ネットスラング」である。いずれも精緻な定義がなされているわけではないが、「ktrkr」は「キタコレ」と読み、予想した事柄が実現したり、期待した結果になったりした場合の驚きや喜びを表す意味で使用されることが多い。「www」は「ワラ」と読まれることが多く、一般的に、笑うさまを表す意味で使用される。
- 3) 本研究の着想を得たこれまでの主な研究課題は、個人研究として「地方都市における工業高校卒業生の学校経験と初期キャリア形成の関連」(科研費若手 B、代表：尾川満宏) 2016-2018 がある。また、共同研究として「専門学校から仕事への移行に関する社会学的研究」(科研費若手 B、代表：片山悠樹) 2016-2019、および JILPT「高卒就職インタビュー調査」2017-2018 がある。共同研究での議論から示唆を得た部分も多い。研究会メンバーの方々に対して謝意を記す。
- 4) 注 3 で示した「地方都市における工業高校卒業生の学校経験と初期キャリア形成の関連」(科研費若手 B、代表：尾川満宏) 2016-2018 による調査。中国四国地方の工業高校卒業生、男女 13 名(卒業後 4~5 年の者が 12 名、卒業後 15 年の者が 1 名)から協力を得た。ほとんどの調査協力者には機縁法によって協力を依頼し、同意を得て参加してもらった。調査は、高校時代から調査時点までの経歴や経験(学校生活と進路選択の経験、卒業後の仕事と生活の状況や現在の悩み、高校で経験したことと現在に役立っていると思うことなど)について自由に話してもらいインタビューを行った。この調査は、平成 27 年度愛媛大学教育学部研究倫理

委員会による研究倫理審査を経て行われたもので、調査協力者には事前に倫理的配慮などについて説明し、インタビューデータの使用方法などについても了承を得た。本稿はこの調査に参加した女性（サキ、ナミ）の事例をもとに構想されており、彼女たちへの調査をパイロット調査と位置づけなおしたうえで、工業系女子に関する本格的な調査を計画している。

- 5) 筆者が以前行った工業高校フィールドワークでは、女子生徒獲得にむけた学校改革で情報系学科が設置されたが、資格や知識・技能などの点で高卒就職は容易でないとみなされていた（尾川 2012）。同様のことは、別地域での工業高校教員ヒアリング（2019年8月）でも確認された。
- 6) 独立行政法人 国立高等専門学校機構ホームページ「高専女子フォーラム」[https://www.kosenk.go.jp/student/jyoshi\\_forum/#about](https://www.kosenk.go.jp/student/jyoshi_forum/#about) (2019/9/2 最終閲覧)
- 7) 一般社団法人 日本建設業連合会ホームページ「けんせつ小町活躍現場見学会」<https://www.nikkenren.com/komachi/field.html> (2019/9/2 最終閲覧)

#### 参考引用文献

- 電気と工事編集部編（2016）『電工男子』オーム社。
- 濱口桂一郎（2013）、『若者と労働：「入社」の仕組みから解きほぐす』中公新書ラクレ。
- 本田由紀（2009）『教育の職業的意義：若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房。
- 石岡学（2011）『「教育」としての職業指導の成立：戦前日本の学校と移行問題』勁草書房。
- 金井郁（2011）「中小製造業における女性労働者」労働政策研究・研修機構『中小製造業（機械・金属関連産業）における人材育成・能力開発』労働政策研究報告書 No.131、pp.268-290。
- 加野芳正（1988）『アカデミック・ウーマン：女性学者の社会学』東信堂。
- 片山悠樹（2016）『ものづくりと職業教育：工業高校と仕事のつながり方』岩波書店。

国土交通省（2015）『建設業における女性の活躍推進に関する取組実態調査 調査報告書』<http://www.mlit.go.jp/common/001114256.pdf> (2018/11/29 最終閲覧)。

中西啓喜（2013）「日本型トラッキングシステムの変容：トラッキング構造の二極化による学歴格差再生産機能」青山学院大学博士論文。  
<https://www.agulin.aoyama.ac.jp/repo/repository/1000/16866/16866.pdf> (2019/9/2 最終閲覧)。

尾川満宏（2012）「トランジションをめぐる『現場の教授学』：ある工業高校における学校と職業の接続様式」『子ども社会研究』18号、pp.3-16。

尾川満宏（2018）「若者の移行経験にみるローカリティ：仕事、家族、地元のリアリティをめぐる社会＝空間的アプローチの可能性」『教育社会学研究』第102集、pp.57-77。

労働政策研究・研修機構（JILPT）（2018）『「日本の高卒就職システム」の現在：1997年・2007年・2017年の事例調査から』研究報告書 No.201。

杉田真衣（2015）『高卒女性の10年：不安定な労働、ゆるやかなつながり』大月書店。

上間陽子（2015）「風俗業界で働く女性のネットワークと学校体験」『教育社会学研究』第96集、pp.87-108。

山田浩之（2003）『マンガが語る教師像：教育社会学が読み解く熱血のゆくえ』昭和堂。

#### 謝辞

本研究はJSPS 科研費 19K02563 の助成を受けた。